2021 年度

地域デザイン科学部コミュニティデザイン学科卒業論文

大谷地区の興隆と今後に向けた課題解決

地域デザイン科学部コミュニティデザイン学科

179129A 髙橋絵重二

「大谷地区の興隆と今後に向けた課題解決」

要旨

今回私が取り扱うテーマであり、私の地元でもある大谷地区は近年、観光地として人気を博している。大谷の地下空間を見学することのできる「大谷資料館」を中心に、県外(東京近郊)観光客や海外からのインバウンド旅行客が数多く押し寄せ、宇都宮市随一の観光スポットとして市内外に大きな影響を与えている。

しかし、煌びやかな観光地には、それ特有の問題もつきものである。例えば、日本を代表する観光地である京都において、コロナ以前は訪日外国人客が急増し、バスは常に満員、市民の生活圏の中に違法民泊業者も増え、住民からは不満の声が噴出しているという。また、世界的に見ると、スペインの都市であるバルセロナにおいて、世界遺産となった建築家ガウディの設計した教会や世界の頂点を争う強豪サッカーチームで著名なこの国際観光都市では、2016 年から、主に外国人観光客を標的にした排斥運動が広がっている。

こと大谷に関して話をすれば、現状大きな問題として取り沙汰されてはいないが、観光客が集中する夏の繁忙期(特にゴールデンウィークやお盆)には、整備が十分行き届いていないこともあり、狭い道路に多くの車が渋滞の列をなす。そのため、周辺住民にとって交通の要である「大谷街道」の機能が麻痺し、大きな影響を及ぼす。季節による問題は他にもある。夏に観光客が集中するということは、冬の閑散期(11 月~2 月頃)が避けられない。また、同様に天候による影響も大きい。地下空間の平均気温は約 8 度で、晴候時と悪天候時での集客の変化は考慮しなければならない。

こうした問題がある中で、大谷の持つ伸びしろを活かすために、課題解決に向けて取り組んでいく必要がある。先述した通り、県外からの観光客だけでなく、インバウンドの旅行客も増えていること、それに引き換え栃木県が魅力度ランキングでは下位に甘んじていることから、大谷は宇都宮市の観光、ひいては栃木県の観光分野における伸びしろを一手に引き受けるポテンシャルを秘めていると言える。そうした大谷の魅力を十分に引き出すために、これまでの大谷の変遷を調査し、これからの発展に向けて考察していくことが本論分の目的である。

目次

はじめに..... 1

1 章　新型コロナ 1-ウイルスと観光..... 2

1-1 コロナ禍における観光..... 2

1-2 アフターコロナにおける観光..... 2

1-3 小括..... 3

2 章　大谷について..... 4

2-1 大谷地区とは..... 4

2-2 大谷石について..... 4

2-3 大谷の歴史..... 5

2-4 大谷の主な観光名所..... 6

2-5 小括..... 7

3 章　宇都宮市、栃木県の他の観光資源について..... 8

3-1 宇都宮市の主な観光資源..... 8

3-2 日光市の主な観光資源..... 9

3-3 足利市の主な観光資源..... 10

3-4 小括 10

4 章　大谷で活躍される方々へのインタビュー 11

4-1 前大谷石あかり隊長　池田克雄(いけだかつお)氏 11

4-2「越路さいかち庵」店主　田島敏子氏　田島孝夫氏 12

4-3 大谷地区総合開発会長　石下氏 13

4-4「miyacos」の活動に参加してみて 14

4-5 小括 16

5 章　大谷がより魅力ある観光地として発展するための提案 17

おわりに 21

あとがき 22

はじめに

本論文の構成として、第一章では大谷に焦点を当てる前に、2021 年 10 月現在、世界的な問題となっている「新型コロナウイルス」についてまとめている。特に観光分野における影響は多大なものであり、新型コロナウイルスによる被害状況を把握し、優先して取り組むべきである感染防止対策ガイドラインの確認などを行っていく。

第二章では本題である大谷の概要について触れている。大谷という地域の特性と、そこから生じる観光地としての大谷について、数千年前までさかのぼる歴史や、今現在、世界的にも注目を集めている観光資源の概要をまとめている。

第三章では、大谷以外の宇都宮市、栃木県の持つ観光資源にも注目している。現在でも大谷の地下冷気を利用した夏用いちごの栽培などを行っているが、大谷、宇都宮市、栃木県の持つ魅力をより発揮するために、相互に協力できるよう様々な観光資源について見ていく。

第四章では、各方面で大谷に携わる方々へ行ったインタビュー調査のまとめを行っている。大谷の観光に長年携わってきた方や、今も最前線で積極的に活動している方から、大谷の実情や、現場の声など貴重なお話を数多くお伺いすることができたので、私の私見も交えつつ、それらを見ていくこととする。

第五章では今後大谷がより発展していくための提案を行っていく。それまでの調査の結果を基に、私自身が、本研究以前から大谷に関わってきた経験も活かして、大谷の抱える課題解決に向けた方策を打ち出している。

以上の流れに沿って本論文は進行していく。

1 章　新型コロナ 1-ウイルスと観光

1-1 コロナ禍における観光

まずは本題に入る前に、2021 年現在、世界的問題となっている新型コロナウイルスについて、観光における問題を調査した。周知のことではあるが、新型コロナウイルスによる観光分野に対する影響は計り知れないものになっている。2020 年の国土交通省観光庁の調査[1] によると、訪日外国人観光客の数は前年の 2019 年の約 3188 万人に対して 5 月(推定)までの累計で約 394 万人、割合にして 71.3%の減、3 月以降に関しては前年の同月比で 90%以上の減である。また、同調査によると関係業界への影響として、宿泊業においては、4 月以降の宿泊予約が 8 割以上の施設で 7 割以上の減、国の支援制度も 9 割以上が利用することとなっている。旅行業界においても、大手旅行会社の予約取扱数は海外旅行がほぼ 100%、国内、訪日旅行も約 95%がキャンセルとなっており、取扱のほぼすべてが国内旅行である中小企業も予約取扱数が 9 割以上キャンセルと被害が甚大なものとなっている。

1-2 アフターコロナにおける観光

国では新型コロナウイルス対策として「業種別ガイドライン[2]」を制定している。これは各種業界団体が感染症専門家の意見に基づいて作成しているもので、観光分野においては各種協会などが主体として作成している。また、旅行業界では特に旅行者自身も感染防止に取組むことが重要であるとして、留意すべき事項をまとめた旅行者向け「新しい旅のエチケット」を公表している。これらを実現するためには、大勢の人が一斉に長期休暇を取り、混雑や密が発生しやすい従来の旅行スタイルを変える必要がある。そのために、休暇取得の分散や、滞在型旅行などの新しい旅行スタイルの推奨を進めていく必要がある。

こうした動きもあってかコロナ禍において、観光トレンドが変化しており、マイクロツーリズム、ワーケーション、アウトドア等への関心が高まった。オフシーズンや密集しない観光地などへのニーズも高まりつつあり、受け入れ側としても、これまで以上に地域全体での魅力向上を図ることが欠かせない。観光庁は廃屋の撤去をはじめとする観光地の面的再生等に積極的に取り組んでいくとのことだ。

しかし、その中で浮き彫りとなっている問題もあり、非感染拡大地域への旅行による感染拡大等が危惧されている。

また、各種調査から、新型コロナウイルス収束後、いわゆるポストコロナの国内外における旅行意欲は高く、需要の回復が見込まれる。そのため観光庁は、「反転攻勢のための基盤

---

[1] 国土交通省観光庁ホームページ「観光をめぐる最近の状況について」2021 年 9 月 20 日閲覧　https://www.mlit.go.jp

[2] 内閣官房ホームページ「新型コロナウイルス感染症対策」2021 年 9 月 23 日閲覧 https://corona.go.jp

整備」として以下の四つを挙げている。

一つ目は宿泊事業者支援。宿泊事業者の収益力向上や、感染拡大防止ガイドラインを踏まえた施設等の整備、新たなビジネスモデルの構築等に対し、様々な制度を活用した総合的支援を行う。二つ目は誘客多角化等のための魅力的な滞在コンテンツの造成。 自然、歴史・文化、食、イベントなどの観光資源を、地域の関係者が感染拡大予防ガイドラインを遵守し、新しいライフスタイルの実践を徹底しながら、より安全で、誘客性の高める取組に対して、外部の企業や専門家と連携して滞在コンテンツの造成、商品化等を支援することで、観光地等の高付加価値化や誘客の多角化を促進する。三つ目は訪日外国人旅行者受入環境整備緊急対策事業。これまで進めてきた、訪日外国人旅行者等がストレスなく観光できる受入環境整備を、各国との人的交流が回復するまでの時間を活用し、各地域で戦略的に取り組む。四つ目は地域の観光人材のインバウンド対応能力の強化観光人材のインバウンド対応能力の強化に取り組む宿泊事業者等に対し、インバウンド減少の影響を強く受ける通訳案内士等を講師として派遣し、接遇能力の向上や、マーケティング、ブランディングに係るノウハウの蓄積等を図る。

1-3 小括

観光分野における新型コロナウイルスによる影響は多大なもので、国内旅行、海外旅行、訪日旅行すべてにおいて 9 割ほどの減となっている。こうした中で国としては、「業種別ガイドライン[2]」を制定し、旅行者に向け「新しい旅のエチケット」を公表し、感染防止に取り組んでいる。また、新型コロナウイルス収束後に向けて、「反転攻勢のための基盤整備」を打ち出しており、観光地としての魅力向上、インバウンド旅行受け入れ態勢の充実などを目標に挙げている。

2 章　大谷について

2-1 大谷地区とは

大谷地区[3]とは、栃木県宇都宮市大谷町付近を指す、城山地区(図 1[4])の一部地域のことである。鋭く切り立つ岩山と灰白色の岩肌に蔦が絡まる奇岩群に囲まれるこの地域は、約 1500 万年前に起きた海底火山の噴火を起源に持つ。この噴火により大量の凝灰岩の地層が生み出され、現在も見ることのできる凝灰岩の岩山が作り出された。そして、この地に住む人々はこの岩山を利用し生活してきた。古くは縄文時代に岩山の洞窟を住居とし、古墳時代には横穴を掘って墓地にしたり、古墳の石室に利用したりした。奈良時代には日本最古の磨崖仏とされる「大谷観音」を自然の岩窟に掘り出し、そして江戸時代初期頃から石材業が興り、明治時代の産業革命により機械化が進み、東京などにも大量に出荷されるようになると、1965 年(昭和 40 年)頃には「大谷石産業」として一大産業となった。しかし 1973 年(昭和 48 年)をピークに年々その採掘量は減少していき、昭和後期から平成に入ると、古くから続く「大谷石文化」の灯火が消えるかと思われるまで、一時はその活気が失われてしまった。その「大谷石文化」を再興させたのが、大谷石を採掘し終えた跡地である「大谷石採掘場跡」だ。一面に灰白色の石壁に囲まれるその地下空間が、特有の景観として全国、ひいては海外の観光客を魅了し、宇都宮市屈指の観光地として、大谷を再び活気づかせることを成功させたのだ。多いときは年間 70 万人が訪れるこの町は、商業施設が集まりつつあり、各方面から熱い注目を集めている。2018 年には日本文化遺産に登録[5]され、最初に認定された 13 の文化遺産の一つとなっている。

図 1

2-2 大谷石について

大谷石とは栃木県宇都宮市の中心から北西約 8m の地点にある大谷町を中心に、東西約 5km、南北約 10km に分布している凝灰岩である（軽石火山礫凝灰岩)。約 1,500 万年以上前に海底火山から噴出した火山灰や軽石岩片が海底に蓄積し、凝結して生成されたもので、

---

[3] 宇都宮市大谷石文化推進協議会「日本遺産「大谷石文化」ガイドアニュアル」

[4] 宇都宮市教育センターホームページ「宇都宮市地域教材」2021 年 12 月 4 日閲覧
http://www.ueis.ed.jp/kyouzai/syakai19/default.html

[5] 宇都宮市ホームページ　「「地下迷宮の秘密を探る旅　大谷石文化が息づくまち宇都宮」が日本遺産に認定されました」　2021 年 12 月 11 日閲覧
https://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/kurashi/rekishi/1015948/1015963.html

緑泥石などの緑色の鉱物を含んでいるため、全体的に緑がかった緑色凝灰岩（グリーンタフ）として知られている。

大谷石の特長として、比重が約 1.7 であり、これは墓石などに用いられる黒御影の比重 3.2 と比較しても 2 倍近くの違いがあり、他の石材に比べ大谷石は軽い石材である。同時に柔らかく加工が容易なため、古くから基礎石、土留め、石塀、外壁、屋根として使用され、石仏、石塔、石祠や民芸品まで幅広く使われている。また大谷石は耐火性に優れ火に強く、1000 度以上の熱にも耐えることから、かまど、七輪、石窯、焼却炉にも使われている。現在は建物の内外装材としての使用が主流だが、吸水性、吸湿性も高く、空気の浄化、調湿、消臭効果があり、コースターや鍋敷き、また、部屋のインテリアや冷蔵庫、シューズボックスに置くことで様々な効果が期待できる。大谷石に含まれるゼオライトがマイナスイオンと強い遠赤外線を放出することで癒し効果があり、細胞の活性化、免疫強化、自律神経の調整、精神安定効果などもある。建築資材としては、天然の石材なのでミソ(火山灰が粘土化した黒い部分)の大きさや模様はものによって様々であり、温かみを感じる素朴な風合いが特徴的である。木と石の中間的な存在である大谷石は木造建築と共に歩んできた日本人にとって親しみやすい石材でもある。温度を一定に保つため、天然の冷蔵庫として使われたり、音響空間としての質も良いため、古い蔵がカフェやダンススタジオなどにリノベーションされたりする。有名建築の例としては、旧帝国ホテルや松が峰教会などがある。

石層	層の厚み	摘要
大谷石　下部層	100m 前後	風化によりくずれやすく、石材としての価値は低い
大谷石 中部層	185m 前後	石材としてもっとも採掘されている
大谷石上下部層	30m 前後	石材として優良
大谷石上上部層		巨大なみそが密集していて石材としてあまり価値はない

表 1 [6]

2-3 大谷の歴史

大谷石が使用された歴史上最も古い例としては、今から約 1,500 年前頃のものである壬

[6] 大谷資料館ホームページ「大谷の地質」2019 年 4 月 12 日閲覧
http://www.oya909.co.jp/contents/%e5%a4%a7%e8%b0%b7%e3%81%ae%e5%9c%b0%e8%b3%aa/

生町車塚古墳、小山市間々田千駄塚付近百塚で凝灰岩（大谷石）の石棺が発掘されている 。その他大谷石が利用された主だったものを表にまとめた。

天平 13 年（ 795 年）	国分寺建立の際の土台に使用
康平 6 年（1063 年）	宇都宮氏の祖、宗円が宇都宮城建築の際使用
永和元年（1375 年）	市内興禅寺境内に大谷石で五輪塔を建立
元和 6 年（1620 年）	宇都宮城主本多上野介正純が城郭普請に使用のため領内田野村より大谷石を採取
享保 6 年（1721 年）	当時江戸の隅田川沿いに大谷石問屋が 16 軒存在（運搬には、現在の石井町の鬼怒川利用説と、姿川利用説がある。）
弘化 3 年（1785 年）	宇都宮二荒山神社の石垣修築に大量使用明治に入り、東京を始めとして関東一円にその販路を広めた。

表 2 [7]

そして、1922 年(大正 11 年)に旧帝国ホテルが、アメリカの建築技師ライト氏の設計により大谷石を使用して建築され、翌年 9 月の関東大震災においてその耐火性、耐震性が認められ、一躍評価を高めた。その後、旧帝国ホテルは取壊されたが、現在は愛知県犬山市にある博物館明治村に一部復元され保存されている。

大谷石の埋蔵量は約 6 億トンと推定されており、1965 年(昭和 40 年)頃の最盛期には、採掘事業場は約 120 ヶ所、年間出荷量も約 89 万トンであったが、その後は年々減少し、2009 年の採掘事業場は 12 ヶ所、年間出荷量は約 2 万トンまで減少している。

1979 年(昭和 54 年)に大谷資料館が開館、初めて一般公開され、以降地下採掘場の活用がされることになる。1981 年(昭和 56 年)には初めて演奏会が開かれ、その後も演奏会やコンサート、その他美術展や映画会、劇場など様々な用途で用いられてきた。また、地下空間特有の雰囲気から映画やドラマ、ミュージックプロモーションビデオの撮影にもよく使用されており、近年ではコスプレの撮影現場としての人気も高い。

2-4 大谷の主な観光名所

大谷資料館の地下採掘場跡は、1919 年（大正 8 年）から 1986 年（昭和 6 1 年）までの約 70 年をかけて、 大谷石を掘り出して出来た巨大な地下空間だ。戦争中は地下の秘密工場として、戦後は政府米の貯蔵庫として利用され、現在では、コンサートや美術展、演劇場、地下の教会、写真や映画のスタジオとして注目を集めている。

---

[7] 宇都宮市ホームページ「大谷石」2019 年 3 月 28 日閲覧
https://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/sangyo/sangyo/ziba/1006777.html

大谷寺本尊千手観音[8]は、平安時代の弘法大師作と伝えられている。古くから大谷観音と称され、鎌倉時代に坂東 19 番の霊場となり、多くの人々から尊崇されて来た。最初は、岩の面に直接彫刻した表面に赤い朱を塗り、粘土で細かな化粧を施し、更に漆を塗り、一番表には金箔が押され金色に輝いていたとされている。本尊の千手観音はじめ、脇堂の釈迦三尊・薬師三尊・阿弥陀三尊の合計 10 躰の石仏は、日本の石像彫刻中、優秀なる技巧を究めたものとして、1954 年(昭和 29 年)に国の特別史跡に、1961 年(昭和 36 年)には、重要文化財に指定された。西の臼杵磨崖仏（大分県）に対し、東の磨崖仏として知られ、美術的にも優れた貴重な石仏である。

平和観音[9]は太平洋戦争の戦死戦没者の供養と、世界平和を祈って彫刻された、高さ 27 メ-トル(88 尺 8 寸 8 分)の観音像である。1948 年(昭和 23 年)に、当時の大谷観光協会と地元の後援のもと、東京芸術大学教授・飛田朝次郎氏が制作を手がけ、大谷の石工達が彫刻した。6 年の歳月をかけ、1954 年(昭和 29 年)に完成し、1956 年(昭和 31 年)には、日光輪王寺門跡・菅原大僧正により開眼供養が行われた。現在は、宇都宮市公園管理のもと自由に参詣でき、多くの人が訪れている。

2-5 小括

1500 万年前に起きた海底火山の噴火によって火山灰が大量に堆積し、それらが凝灰岩として層をなしているものが、大谷地区を形成する「大谷石」である。この地に住む人々と大谷石の関りは、古くは縄文時代から始まり、石材として多くの優れた特性を持つ大谷石は、昭和後期に「大谷石産業」一大産業として興隆するに至る。しかし以降は、より扱いやすい建材が登場し、石材としての大谷石の名は廃れていってしまう。そんな大谷地区は、世界的にも稀有な、人工的な石材の地下空間が有名になり、観光地として国内外から多くの観光客を惹きつけることに成功している。

---

[8]宇都宮市観光コンベンション協会ホームページ「大谷寺」2021 年 12 月 4 日閲覧
http://www.utsunomiya-cvb.org/cvbmember/2638.html

[9] 大谷寺ホームページ「日本最古の石仏「大谷観音」と高さ 27 メートルの「平和観音」」2021 年 12 月 4 日閲覧　http://www.ooyaji.jp/

3 章　宇都宮市、栃木県の他の観光資源について

大谷町のある宇都宮市、そして栃木県は数多くの観光資源を有している。そうした観光資源と大谷を結びつけることで、大谷のさらなる発展に繋げることができるとともに、相互に良い影響を与えることができるだろう。本章ではそんな宇都宮市や栃木県内に存在する観光資源についてまとめていく。

3-1 宇都宮市の主な観光資源

宇都宮市と言えば餃子だが、宇都宮が餃子のまち[10]となったのは、市内に駐屯していた第 14 師団が中国に出兵したことで餃子を知り、その帰郷後に彼らが広めたからだそうだ。また、宇都宮は夏が暑く、冬は寒い内陸型気候のため、スタミナをつけるために餃子の人気が高まったとも言われている。その後、1993 年には、市内餃子専門店など 38 店舗により宇都宮餃子会が発足し、現在は約 90 店舗が加盟している。

また、栃木県で言えばいちごも有名で、生産量、販売量ともに全国一位なのだが、大谷においては、大谷石採石場跡地の空気と貯留水を利用することで、年間を通して 5～10℃と安定した温度を保ち、その冷気エネルギーを活用した「大谷夏いちご[11]」を作っている。大谷夏いちごは、栃木県いちご研究所が開発した「なつおとめ」を使い、先述した方法により大谷で栽培された、夏秋用いちごである。しっかりとした甘みと酸味（糖度 8%、酸度 0.8%程度）で食味が良いという特徴を持ち、見た目も色、形、光沢ともに良く、スイーツの食材として広く愛用され、洋菓子店やホテルなどからも高い評価を受けている。外気温が 30℃を超える真夏でも、大谷石採取場跡地の冷気を地上に引き上げ、張り巡らされたチューブに通し、いちごの株元を冷やす「クラウン冷却」という方法を用いることで、100%地域産出のエネルギーで夏いちごの栽培を行っている。

食資源以外で言えば、宇都宮市には強豪スポーツチームも存在する。「宇都宮ブリックス」は国内でも有数の強豪バスケットボールチームであり、日本のプロバスケットボールリーグである「B リーグ[12]」において常に上位争いをし、優勝経験もあるチームだ。

「宇都宮ブリッツェン[13]」は、「プロロードレースへの参戦、自転車を通じたスポーツ教育

---

[10] 宇都宮市 hp「餃子のまち」2021 年 9 月 20 日閲覧
https://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/citypromotion/1007188.html

[11] Oya, Stone City ホームページ「【地下×農業】大谷夏いちご」2021 年 12 月 3 日閲覧
https://oya-official.jp/story-project/%E3%80%90%E5%9C%B0%E4%B8%8Bx%E8%BE%B2%E6%A5%AD%E3%80%91%E5%A4%A7%E8%B0%B7%E5%A4%8F%E3%81%84%E3%81%A1%E3%81%94/

[12] B.LEAGUE ホームページ 2021 年 12 月 4 日閲覧　https://www.bleague.jp/

[13] 宇都宮ブリッツェンホームページ「チームプロフィール」 2021 年 12 月 4 日閲覧

や安全への啓蒙活動、地域活性化活動などを行う日本初の地域密着型プロサイクルロードレースチーム」である。日本プロロードレースリーグである JCL(ジャパンサイクルリーグ)に所属し日本国内の UCI(国際自転車競技連合）公認ロードレースなどにも参加する。そして宇都宮市におけるサイクルロードレースと言えば、世界的にも有名な「ジャパンカップサイクルロードレース[14]」がある。「ジャパンカップサイクルロードレース」とは、アジアにおける最大級のレースの 1 つであり、日本で唯一 UCI プロシリーズに認定された、アジア最高位のワンデイロードレースである。2019 年大会では 3 日間延べ 14 万人を超えるサイクルファンが宇都宮市に集い、世界的にも注目されるレースであることが伺える。

3-2 日光市の主な観光資源

日本を代表する世界遺産である「日光の社寺[15]」。その中でももっとも有名な「日光東照宮」は徳川家康が祀られた神社で、現在の社殿群は、そのほとんどが 1636 年(寛永 13 年)に徳川家 3 代将軍家光の手による「寛永の大造替」で建て替えられたものである。境内には国宝 8 棟、重要文化財 34 棟を含む 55 棟もの建造物が並び、そのすべてが全国各地から集められた名工により、豪華絢爛な彩色や、趣向が凝らされた数多くの彫刻が施されており、今なお世界中の人々を魅了し、数多くの観光客から人気を博している。

また、日光は全国有数の源泉地としても有名であり、「鬼怒川温泉[16]」、「湯西川温泉[17]」、「川治温泉[18]」は全国屈指の温泉郷である。

鬼怒川温泉は江戸時代に発見されたもので、当時は僧侶や大名のみが入ることを許されたという由緒正しき温泉だ。明治以降に一般開放されてからは多くの観光客が訪れ、鬼怒川沿いには旅館やホテルが建ち並ぶ関東有数の大型温泉地として発展した。泉質はアルカリ性単純温泉で、神経痛や五十肩、疲労回復や健康増進に良いとされており、無味無臭でくせがなく、肌にも優しいため、多くの人が楽しむことのできる温泉となっている。

湯西川温泉は壇ノ浦の合戦に敗れ、逃れてきた平家の落ち人が、河原に湧き出る温泉を見

---

https://www.blitzen.co.jp/team/

[14] JAPAN CUP CYCLE ROAD RACE ホームページ「ジャパンカップとは」 2021 年 12 月 4 日閲覧 https://www.japancup.gr.jp/2021/about

[15] 日光市観光協会公式サイト行こう日光！日光旅ナビホームページ「日光東照宮」2021 年 12 月 5 日閲覧 http://www.nikko-kankou.org/spot/2/

[16] 日光市観光協会公式サイト行こう日光！日光旅ナビホームページ「鬼怒川温泉」2021 年 12 月 5 日閲覧 http://www.nikko-kankou.org/spot/51/

[17] 日光市観光協会公式サイト行こう日光！日光旅ナビホームページ「湯西川温泉」2021 年 12 月 5 日閲覧 http://www.nikko-kankou.org/spot/34/

[18] 日光市観光協会公式サイト行こう日光！日光旅ナビホームページ「川治温泉」2021 年 12 月 5 日閲覧 http://www.nikko-kankou.org/spot/53/

つけ傷を癒したことが発祥と伝えられる、歴史の古い温泉である。温泉地名の由来ともなった湯西川の渓谷沿いに旅館や民家が立ち並び、温泉を楽しむだけでなく、川魚や山菜、ジビエや山椒魚の珍味など季節に合わせた地元料理を堪能できる。

川治温泉は男鹿川と鬼怒川の２つの河川が合流する渓谷に位置する、小さく静かな温泉郷だ。始まりは江戸時代で、会津西街道を利用する旅人や、地域の人々に古くから親しまれてきた。泉質はアルカリ性単純泉で、神経痛やリウマチのほか、特にケガに効能があるといわれている。下流へ進むと、景勝地「龍王峡」へつながる遊歩道も整備されており、散策やハイキングを楽しむことができる。

3-3 足利市の主な観光資源

「あしかがフラワーパーク[19]」は栃木県足利市堀込町(現：朝倉町)に「早川農園」として1968 年に開園した。以来 「250 畳の大藤」 として愛されていたが、都市開発の為 1997 年に現在の足利市迫間町(はさまちょう)に移設し、「あしかがフラワーパーク」としてリニューアルオープン、現在の形に近い営業形態となる。

元々湿地帯だった場所に移設した為、園内には 250 トン を超える量の炭を敷き詰めることで、土壌の浄化、活性力の向上を図った。園内の拡張整備も進み、現在は 100,000 ㎡ の敷地面積となっている。

園のシンボルである大藤は日本の女性樹木医第一号である塚本こなみ氏によって移植されたもので、大藤の移植は、当時としては前例がなく、全国から注目を集め、日本で初めての成功例となった。四本の大藤と 80m におよぶ白藤のトンネルは栃木県天然記念物に指定されており、これらが見頃を迎える 4 月中旬から 5 月中旬の 1 ヵ月間は 「ふじのはな物語~大藤まつり~」 が開催され、多くの来園客が足を運ぶ。

また 10 月下旬より開催されるイルミネーション「光の花の庭」は夜景コンベンションビューローが認定する日本三大イルミネーションに選ばれ、2016 年から 2019 年まで 4 年連続で全国の夜景鑑賞士が選ぶ全国イルミネーションランキングにおいて、イルミネーション部門で全国 1 位を獲得。四季折々の数多くの花々で彩られ、年間で 150 万人以上もの来園者を迎え入れている。

3-4 小括

大谷以外の観光資源として、宇都宮市には餃子やいちごなどの食資源、バスケやロードバイクなどのスポーツといったものが活用できる。また県内に目を向ければ、日光市の「日光の社寺 [12]」や温泉街、足利市の「あしかがフラワーパーク [16]」などがあり、それらとの幅広い提携による相互の影響を図っていくべきだ。

---

[19] あしかがフラワーパークホームページ「フラワーパークとは？/園の歴史」2021 年 9 月 7 日閲覧　http://www.oya909.co.jp/contents/

4 章　大谷で活躍される方々へのインタビュー

本章は、2021 年 10 月から 12 にかけて行った現在大谷で活動されている、四つの主体の代表の方々へのインタビュー内容をまとめたものである。

4-1 前大谷石あかり隊長　池田克雄(いけだかつお)氏

元々は鹿島建設に勤務していたが、実家が大谷石の石屋で跡を継ぐことに。とちぎ博(1984 年)でストーンフェスティバルを開催した時に、市の観光課とつながり、「フェスタ in 大谷」で他の地域とは異なる大谷独自のイベントを行いたいという相談を受けた。丁度その時に読んだ新聞の記事の中に、香川で御影石を使った石あかりのイベントをやっていることを知り、大谷石でも石あかりをやってみるように提案したことが「大谷石夢あかり」を始めるきっかけとなった。

初めて行ったのは「フェスタ in 大谷」の中で、景観公園の真ん中に石とろうそくを飾ったそうで、「フェスタ in 大谷」では翌年合わせた計 2 回行った。その後、「フェスタ in 大谷」の石あかりを見た当時の城山地区市民センター所長が、市民センターでもやってみてはどうかという提案をし、センター内にモニュメントが設置され、毎週石あかりを行うようになった。丁度この時期に、当時、宇都宮大学工学部の藤本郷史教授から、大谷の良さを出すことができるようなイベントをやらないかという誘いを受け、「石あかり隊」を創設、城山地区コミュニティ協議会の目的団体とした。

初めの隊長は杉浦せつ子氏にお願いし、2008 年には城山地区文化祭と農業祭で計 2 回行った。そして翌 2009 年から平和観音前の大谷公園で「大谷石夢あかり」として 8 月のお盆の時期に単独で開催するという現在の形になった。

始めは来場者が少なかったが、ある時「自分でも火を灯したい」という来場者の声を受け、来場者も一緒にろうそくに火を灯すことが出来る参加型のイベントにしたところ、年々人々の間で話が広まり、地域住民も積極的に協力してくれるようになったという。小学校や幼稚園などもキャンドルづくりから参加してくれるようになり、コロナ前には数千人規模が参加する一大イベントへと発展した。

こうした背景には池田氏の、大谷という地域を観光地として発展させたいという思い、そしてイベントをやるなら、やる人と見る人とに分かれるのではなく、両者を一緒にして取り組むことが重要だと言う思いがある。日本の伝統文化であるよさこいや阿波踊りのように、見る人が参加することが出来る取り組みは、参加者も主体として関わることで当人にとって特別な思い出として強く心に残るからだ。

また、「人とのつながり」と「考え方」も重要だと池田氏は言う。これまで「大谷石夢あかり」が大きく成長してきたことや、大谷が観光地として復興してきたことは、地域、行政、民間など多くの主体がつながり、同じ思いで進めてきたことと大きく関係がある。たとえば、大谷の奇岩群は「陸の松島」とも言われる絶景スポットだったが、大谷石産業の衰退と伴っ

て、木々が生い茂り、その姿が見えないほどに廃れていた。その一因として、実は岩一つ一つは個人の所有であり、各自で整備することが困難であったという事情があったところ、行政の補助金を得て、年々整備が進み、観光スポットとして活用されるまでになった。こうした行政とのつながりなどに見られる、同じ地域における異なる主体の取り組みが、地域の復興や、観光化などに伴う経済効果に寄与すると池田氏は考える。

大谷地区の展望について、池田氏はまだまだこれからだと言う。石工業、農業、観光がいかに連携するか、そして、宇都宮の大谷から世界の大谷にしていくために、どう地域観光に取り組んでいくかが今後の課題である。

そのためには採掘跡の活用が必要だと考えられる。石は物質的に限りがある資源だが、採掘跡の空間はなくなることはない。まずは安全の確保、つまり陥没対策が目下の課題であるわけだが、その対策として、天井を取っ払ってしまおう、という試みがなされている。池田氏が建設業をしていたときの仕事で、たまたま知り合った方のつてで、イタリアから機材を持ってきて実際に天井を取ってしまった跡地もあり、その活用を考えているとのことである。

また、大谷をエンターテイメントのまちにしたいという思いも強くなっているという。大谷では毎年、ロードバイクの世界大会である「サイクルロードレース　ジャパンカップ」が開催されており、映画の撮影地としてもコロナ前では年間 200 本もの映画が撮影されている。その中で、池田氏が今一番力を入れて取り組もうとしているのはコスプレだ。今、独特の景色を求めて全国のコスプレイヤーが大谷を訪れているのだが、そうした動きを受けて、池田氏はコスプレについて勉強をしていたそうだ。丁度その時に、たまたま食事をした飲食店が、宇都宮のコスプレ撮影会主催団体である「miyacos」代表の篠原美香氏の実家で、篠原氏と話をする中で、コスプレのイベントを開催するようになった。今後は大谷において全国規模のコスプレイベントを開催出来るようにすることが、池田氏の当面の目標だという。

4-2「越路さいかち庵」店主　田島敏子氏　田島孝夫氏

「越路さいかち庵」は大谷地区立岩通りの入口付近に位置する喫茶店だ。奥さんの敏子さんを一応の店主として、旦那さんの孝夫さんがそのお手伝いという形でお店を切り盛りしている。3 年前に田島さん夫妻が、昔娘さんが住んでいた空き家を店舗兼住宅として改装する形でオープンした。娘さんが住まなくなった後も何度か遊びに来ていたそうなのだが、その際に大谷を訪れた観光客に案内を聞かれることが多々あったそうだ。そうしている内にお茶を出し始めたのをきっかけにお店を開くことになった。

お店を始める前は、お二人共元々建築に関する会社に勤めていたそうだが、夫の孝夫さんは大谷の生まれで、妻の敏子さんも建設会社の材質部門にいた経験から大谷石についても造詣が深かったために、退職後、大谷資料館の前館長からガイドの仕事を頼まれた。最初は孝夫さんに声が掛かったのだが、孝夫さんが断った結果敏子さんがやることになった。その後更に飲み物の販売も頼まれ(現在大谷資料館の前にある喫茶店が当時なかったため)、資料

館の外で甘酒の販売もすることになり、観光客や観光バスの添乗員にお話をしながら振る舞った経験も、現在のお店を開いたことに関わっているようだ。そして今から約四年前、大谷資料館の目の前に喫茶店が出来ると、飲み物の販売が難しくなったため、甘酒の販売とともに資料館のガイドを辞めることになり、先述の通り今のお店を開くこととなった。

お店を始めてからも敏子さんが病気で倒れたり、二年前の台風による被害を被ったりと、大変なこともたくさんあったそうだが、幅広く大谷の案内が出来る経験や、生まれ育った土地を大事にしたいという思いからお店を続けている。最初は飲み物とお茶菓子だけの提供で、大谷石の話をお茶請け代わりにでも出来れば良いと思っていたそうだが、食事の提供も必要だと感じたため、こだわりのそば粉を使用したそばがきも作るようになった。また、お土産品にも力を入れており、ご近所の方の陶芸品や、親族の方が経営している煎餅も販売しており、特に煎餅に関しては、つい先日オープンした「BELL TERRACHE OYA」でも取り扱われるほどの人気があるとのことだ。

こうした活動で大谷に貢献されてきたお二人だが、大谷には発信しきれていない魅力がまだまだたくさんあるという。大谷地区全体に広がる手付かずの自然がその一つだ。現在主な観光拠点となっている採掘跡の地下空間も素晴らしい観光資源であることには間違いないのだが、自然に形作られた大谷特有の風景にももっと注目が集まるべきだ。そのためにはウォーキングコースの整備や、各名所の案内板設置など現在ある観光資源の活用、周知の促進を行っていくべきである。田島さんの話によると立岩通り沿いには奇岩群の一部が多く存在し、岩壁には花も自生し、時期になると大量に咲くとのことだ。また、道沿いの川辺にはカワセミが住み着いており、そうした面でも自然を楽しむことが出来るそうだ。

4-3 大谷地区総合開発会長　石下氏

現在は大谷地区総合開発の会長を務めている石下氏だが、地元の農業と石材を営む家の生まれで、家業を手伝いつつ 40 歳まで宇都宮青年会議所に勤めていたそうだ。その後、地元の石材店の加盟する石材協同組合の理事長に就任したのだが、大谷地区の一大イベントである「フェスタ in 大谷」の委員長も石材協同組合の理事長が兼任することになっていたため、これをきっかけに大谷地区の観光に深く携わっていくことになる。

大谷地区における観光の歴史は石材協同組合が大きく関わっている。というのも、大谷地区の観光が活発になったのは先述した通りここ数年ほどの話であり、私もよく知る 10 年ほど前までの大谷は観光とは全くの無縁だったため、しっかりと組織化された観光に関する団体が皆無だったそうだ。そのため、「フェスタ in 大谷」の前身である「大谷フェスティバル」を開催するにあたり、主体となる団体が必要となった時に石材協同組合しかなく、その理事長が委員長になる流れとなった。

その「フェスタ in 大谷」の始まりは、観光客が少なくなった大谷を活気づける目的で、市が補助金を出してスタートする形となった。しかし、最初は委員会も補助金の使い方が分からなかったせいもあってか、所謂地域のお祭りになってしまっていたそうだ。そうした中

で石下氏が委員長になってからは「フェスタ in 大谷」を観光のためのものに変えていった。最初に行った熱気球を始めとしてよさこいやライトアップなど対外的な催しを推し進めていき、「大谷石夢あかり」でも昼の観光客のために作家の方にオブジェを作って貰うなどした。

また、大谷の観光に多大な影響を与えた大谷資料館についても成り行きをお話いただいた。今の資料館へと変化するのに至った大きなポイントとしては、経営者、そして経営方針の変化が関わっていたそうだ。およそ十年前に経営者が変わったそうなのだが、元の経営者の方が「知る人ぞ知る観光地」程度の知名度で良いというスタンスだったため設備の整備もままならず、およそ観光地化は望めないような状況だった。それが変わる機会となったのは 2011 年の東日本大震災だった。地震の衝撃で地下空間内に落石が起こったため、事故の危険性を恐れた前経営者がしばらく休館にした後、経営権を売りに出した。その経営権を買い取ったのが現在の経営者の方で、地域の人が買わなければどういった使われ方をされるか分からないという使命感で行動を起こしたそうだ。そして経営方針を大幅に転換し、施設の整備を始め、地下空間のライトアップや写真撮影の許可、綺麗に梱包するお土産屋のオープンも集客に繋がり、現在の資料館が形作られた。

石下氏は、大谷はあと 5 年もあればもっと変わることができると話していた。宇都宮市がより大谷地区での観光に力を入れて取り組んで貰えるようになったからだ。実際もうすでに、市営駐車場内に観光案内所を設置する計画も進みつつある。観光案内所が出来れば、今まで注目されてこなかった観光名所を紹介してもらうなどして、現在大谷の抱える問題の一つである観光客の滞在時間を延ばすことに一役買ってもらえることだろう。しかし、石下氏はただ滞在時間を延ばすだけでは大谷地区の活性化には直接は繋がらないと考える。地域の活性化を図るには夜間の客数を増やすことが最も重要だそうだ。なぜなら、飲食店では特に酒類の売上が利益に繋がりやすいからだ。そして利益が出ると分かれば事業者側も店を出しやすくなり、より地域の活性化に繋がることになる。そのためにはまず、大谷地区全体でライトアップを通年行うことを目標にして動き出す必要がある。現在は何かイベントがなければ夜のライトアップは行われない上、行ったとしても景観公園付近だけのことも多い。土日祝日だけでも通年行うことが出来れば夜間の客数増加に大きく貢献してくれることだろう。もちろん、地域全体でそうした行動を起こすには、住民の協力も必要不可欠だ。ライトアップの設備を常設するためには個人が所有する土地を使わせてもらうしかない。そうするためにも市に補助金を出してもらい、主体となる団体が住民に利用を促してもらうことが石下氏の当面の目標だそうだ。

4-4「miyacos」の活動に参加してみて

「miyacos」とは[20]宇都宮市を中心に活動しているコスプレ撮影会主催団体だ。今回私はそ

[20] miyacos ホームページ 「miyacos とは？」 2021 年 10 月 22 日閲覧

の活動の内、オリオン通り付近で行うコスプレイベントの「オリコス」と、大谷町内に存在する「稲荷山」てのコスプレ撮影会にお手伝いという形で参加させて頂き、様々なことを見聴きすることが出来た。

まずオリコスについて、今回のお手伝いで最も注意しなければならなかったのは周辺住民との兼ね合いに気をつけることだった。今回のイベントはハロウィンに行ったということもあり、街全体でそういう雰囲気があったからか、レイヤー(コスプレをする人のこと)の方がいても自然な空気だった。しかし、それでも衣装によっては注意しなければいけないこともあり、また、一般客の中にも昼飲みしている方や、miyacos に申請を出していないカメラマンといったようなレイヤーの方に迷惑を掛ける不審者など、公の場で衝突が起きないように細心の注意を払う必要があった。

次に稲荷山での撮影会について、普段は一般開放されていない場所を利用できるのだが、私は入ったことのある場所だったので、そこまで多くの人が利用できる場所ではないと思っていたので、あまり大きな規模のイベントだとは思っていなかった。しかし、飲食店が複数ケータリングする程、イベントとしてある程度の規模を持っていることにまず驚いた。

しかし、参加者が少ないからなのか、個人事業だからなのかは分からないが、数があまり多くなく、利用する客もあまり多くはないと感じたので、商業的価値はあまり生じていないのではないかと見受けられた。基本的に、撮影以外はメイン会場で待機していることが多いため、参加者にとっても、出展数が増えることはイベントを楽しむ上で良い影響を与えることになるだろうが、そもそも、出店する側としても、ケータリングするメリットが多くなければ中々出店まで踏み切ることは難しいだろう。

そのためには、参加者をもっと増やす必要があるのだが、参加費がそれなりの値段(一人約 10,000 円)であることや、基本的に撮影することがメインのイベントなので、丸一日撮影を行うこと、カメラマンとのコネクションが必要なことにより、敷居が高くなっていることが課題となっている。

また、参加者がなるべく不自由なく利用できるように解放スペースは広く確保されているのだが、そのため、主催者側が参加者との連絡が取れない場合、参加者の動向を把握しづらいことも分かった。大きな問題にはならなかったのだが、予約の時間に参加者が来ないなどのトラブルが起きたときに対処がしづらいということなどは明確な問題ではあるので、連絡手段の確保など、より注意することになる。景観を損なわないために規制線などを張ることができないことも、参加者にとってどこまでが利用できるスペースなのかわかりにくくなってしまう。

ここまで、今回参加した両イベントについて、それぞれ感想を述べてきたが、双方を比較して街中と大谷のような田舎とでは異なる点が多々あることにも気づいた。オリオン通りでは比較的人が集まりやすく、参加費もそこまで高額なものにはならない(今回のオリコス

---

https://www.miyacos.com/

は参加費 1500 円だった)が、それだけ人と人との接触に注意しなければならない。逆に大谷行う場合は、場所の利用料として参加費もそれなりのものになってしまうが、その分撮影に集中することができ、場所も大谷特有の風景の中、最高のロケーションで撮影することができる。それぞれ良さがあり、両方行うことで(他にもイベントはあるのだが)、様々なターゲット層を取り組む意図があると感じた。

今回 2 つのコスプレイベントに参加してみて、コスプレイベントの実際を見ることができたわけだが、華々しいイベントの雰囲気の裏には、様々な苦悩があることが分かった。しかし、それでも miyacos の代表である篠原氏が miyacos の活動を続けるのには、この活動を通してコスプレのコミュニティの輪を広げていきたいという思いがあるからだ。ただコスプレをして終わりではなく、それを他の人と見せ合うことに意味があるのは当たり前の話であって、だからこそレイヤー同士の繋がりはコスプレの界隈において非常に重要なものだ。そのために今回のオリコスのような、学生でも参加しやすいようなイベントを開催し、コミュニティを広げる機会を設けることが miyacos の役割だと、篠原氏は言う。

4-5 小括

以上四つの主体の方々からお話を伺ってきたのだが、それぞれ主張こそ異なる部分があるものの、地元をよりよくするために活動をしたいという思いが共通していることはよく分かった。また、同時に大谷にはまだ活用できる資源が残されており、それらを活用すべきだと考えていることもわかったのだが、そうした資源の活用については次章で触れることとする。

以上のインタビューの結果から、分かったこととして、見る場所や周回することのできる場所が少なく、観光客の滞在時間が少ないこと、それには大谷の魅力が発信され切っていないことが挙げられる。また、夜間の観光客が少なく、事業者の誘致促進の障害となっていることも大きな課題である。

その他、次章で大谷の観光について考案していくにあたり、大谷の抱える課題としてあげられるものに、観光地としての特性上季節や天候によって来客数が左右されやすいこと、これにより繁忙期と閑散期の差が大きいこと、繁忙期は特に来客が集中するので交通網が麻痺することなどがある。

5 章　大谷がより魅力ある観光地として発展するための提案

前章で、現在大谷の抱える課題について一通りまとめたわけだが、大谷をより活気ある観光地へと発展させるために、私はこの中で特に、来客数の少ない閑散期(11 月~2 月頃)や夜間、悪天候時について焦点を当てていく。理由としては、大谷においてこの部分は伸びしろであり、ここを改善することができれば集客数の増加を比較的容易に見込むことができ、集客数を増やすことができれば公共交通機関の充実、インフラ整備、魅力発信の促進などにつなげることができるからだ。

まず私が提案するのは、体験型観光形態の確立だ。現在、地下採掘場跡地の利用は様々な団体が行っているが、通年行われているのは観覧がメインで、アクティビティなどはイベントごとでしか行われていない。そのため、私は参加型のアクティビティを行うことで、今まで取りこぼしていたマーケット層を獲得し、大谷の新たな魅力として広めていく必要があると考える。

そこで、私が考案したのは地下採掘場跡地の「地下探検ツアー」だ。以前私が参加した空間体験ツアーでは地上からカートに乗って地下空間へと向かい、「露天掘り(図 2[21])」の採掘場跡の空間を楽しむことができたのだが、私はこの時、カートでの移動の方に着目した。カートのライトのみに照らされた狭い通路内を進むのは、遊園地のアトラクションに乗っているような感覚で、今までの大谷になかった形の体験活動を提供してくれるだろう。運転手のガイドを聞きながら進むことができるという点もこの体験活動の良さの一つだ。

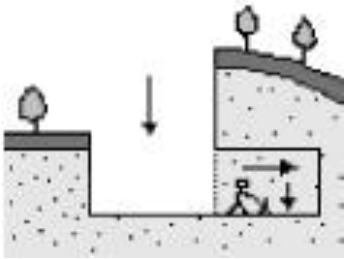

図 2

また、露天掘りの採掘跡もアクティビティの場として利用することができると考える。「ラペリング(懸垂下降)」と呼ばれるロープを使って崖壁などを降下する方法がある。この「ラペリング」は、ヘリコプターによる救助活動などで用いられることで有名であるが、世界各地の観光名所でも、その絶景を楽しむために用いられることもある。日本においてもこのラペリングをアクティビティとして楽しむことのできる場所がある。静岡県は伊豆市北部に位置する「城山(じょうやま)」では、その切り立った岩山の急斜面で「城山ラペリングツアー[22]」が行われている。全くの偶然ではあるが、大谷の位置する地域も「城山(しろやま)」地

---

[21] 大谷資料館ホームページ「大谷石の採掘方法と採掘形態」2021 年 12 月 9 日閲覧
http://www.oya909.co.jp/contents/%e5%a4%a7%e8%b0%b7%e7%9f%b3%e3%81%ae%e6%8e%a1%e6%8e%98%e6%96%b9%e6%b3%95%e3%81%a8%e6%8e%a1%e6%8e%98%e5%bd%a2%e6%85%8b/

[22] 伊豆のアウトドアツアー アドベンチャーサポートホームページ「ラペリングツアー説明」2021 年 12 月 10 日閲覧

区である。話を元に戻すが、この「城山ラペリングツアー」では、岩肌を簡単なところから練習し、最終的には高さ 120m の岸壁を下る、計 6~8 時間ほどのツアーとなっており、初心者でも参加することができるようになっている。料金は一人につき二万円で、これにはガイド料、装備レンタル料、保険料などが含まれる。ラペリングを行える場所は他にもあり、熊本県阿蘇市で活動している「ASO ACTIVE NATURE GUIDE あそ Be 隊」では、阿蘇中央火口丘の一つである往生岳の溶岩壁をラペリングで火口底まで下っていく「ボルケーノラペリング[23]」を行っている。こちらのアクティビティは 2 時間半ほどで行えるもので、料金も 7,700 円、無料で用具の貸し出しも行っているそうだ。このラペリングによる体験ツアーを大谷の採掘場跡地で行えば、地表から露天掘り跡の縦穴を通ることで、昔の石工たちが見てきたものと同じ光景を体感することができるだろう。もちろん、ラペリング初心者の人にとって一人では難しいこともあるかもしれない。その際はガイドの補助など、ガイドの訓練が必要な場合や、装備の拡充が必要な場合を考慮しなければならない。

こうして地下空間内に入った後は、「坑内堀り(図 4)[18]」という方法で形作られた、石柱が並び立つ迷宮のような坑内の独特な光景を楽しむことができる。当時使用されていた照明を利用してライトアップを行うことも場所によっては可能で、地下空間の雰囲気を楽しむとともに、写真映えのする場所を探して撮影し、拡散してもらう効果も見込める。(写真は 2021 年 11 月 21 日に撮影)

図 4

また、大谷に存在する廃墟の利用方法についても考えた。イベントなどで一時的に利用されることもある場所なのだが、これを肝試し型の体験ツアーに利用できるのではないだろうか。もちろん曰く的な場所ではなく、事故があったようなこともない場所ではあるのだが、地域の子供たちが時期になると肝試しに行くこともあるような場所ではあるので、雰囲気は十分あることだろう。

ライトアップされた地下空間

これらの体験ツアーの利点は、夜間での活動もできることだろう。地下空間内は昼夜問わず常に暗闇の只中にあり、肝試し型体験ツアーに関して言えばむしろ主に夜間に行うことになる。悪天候時に関しても、雨や雪の中で行う活動にも雰囲気があり、天候

---

https://www.adventuresupport.net/%E3%83%A9%E3%83%9A%E3%83%AA%E3%83%B3%E3%82%B0%E3%83%84%E3%82%A2%E3%83%BC/

[23] ASO ACTIVE NATURE GUIDE あそ Be 隊ホームページ「「ラペリング」アクティビティの紹介」
https://asobe-tai.com/rappelling/

によってコースを変更するなどすれば、むしろ特別感のある体験になる。今までになかった客層のターゲッティングにもつながり、より多くの来客数を見込むことができるだろう。

こうして来客数の増加につなげた上で、事業者の誘致を促進することができたなら、次に、酒類の提供に関しても考案していく必要がある。こと宇都宮に関しては、「カクテルの町[24]」として有名であるので、提供において事欠くことはないだろう。いちごを使ったカクテルや、宇都宮市をイメージして作られたカクテルなどもある上、今後、宇都宮市の名産品や、提供される料理に合ったお酒の開発など、裾野の広い分野であることにも期待が持てる。また、宇都宮市の地酒として、市内の大谷石で出来た酒蔵の地酒や、大谷の地下空間を活用して作られた、地下蔵熟成ワイン[25]なども活用できるだろう。こうした動きが進めば、宿泊施設の必要性も出てくるだろうが、現状、宿泊してまで見て回る場所もないことが課題であり、民泊などから推し進めていくべきだと思われる。

そのためには、さらなる魅力の発信や、それに伴う観光客の滞在時間の増加により、リピーターの創出を図ることが必要だろう。現在、宇都宮市の主導で建設が進められている「大谷観光周遊拠点施設(仮称)[26]」が完成すれば、情報発信による観光客増加、地域の回遊性向上、滞在型観光の促進などの効果が期待される。しかし、完成は少なくとも二年以上先の予定であり、現在ある観光資源の発掘を今のうちから推し進めていく必要がある。例えば現在も砕石を行っている数少ない大谷石石材店の一つである「大谷石のカネホン[27]」では、採掘場の案内ツアーも行っているほか、大谷石で出来た石窯でのピザ焼き体験も行っている。また、採掘場の上にロープを通して渡るジップラインを設置予定とのことで、さらなる体験型観光充実が期待できる。

---

[24] 宇都宮カクテル倶楽部ホームページ　2021 年 12 月 6 日閲覧
https://www.ucclub.net/index.html

[25] Oya, Stone ワインの神様に愛された酒蔵」 2021 年 12 月 6 日閲覧
https://oya-official.jp/story-practical/%e3%83%af%e3%82%a4%e3%83%b3%e3%81%ae%e7%a5%9e%e6%a7%98%e3%81%ab%e6%84%9b%e3%81%95%e3%82%8c%e3%81%9f%e7%9f%b3%e8%94%b5/

[26] 宇都宮市ホームページ　「(仮称)大谷観光周遊拠点施設の概要について」 2021 年 12 月 10 日閲覧
https://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/026/463/030224ooya.pdf

[27] 大谷石の KANEHON ホームページ 2021 年 12 月 10 日閲覧　https://www.kanehon.jp/

また、そのカネホンに向かう道は「立岩通り」と呼ばれる通りで、日本文化遺産に登録された構成文化財の一つである、大谷の奇岩群が集まる場所でもある。しかし、トヨタの協力でスローモビリティ[28]が走行しているにも関わらず、現状、観光客の集まるような場所ではなく、この道を通る人がいても通り過ぎてしまう人がほとんどだ。その原因として観光名所としての発信力のなさが挙げられるだろう。この場所を紹介している媒体が少ないということもあるが、それ以上に案内の充実にしてなさのほうが目に付く。奇岩群が見える場所に行っても案内板すら設置されておらず、奇岩群自体の整備不十分さも相まって、ガイドがついていなければ、どこにどの岩があるのかさえ分からない状態だ。そこで私は案内板の設置だけでも行うべきだと考える。下イメージ図[29]に示すように、案内板そのものには簡単な説明と QR コードだけ示し、詳しい説明は QR コードを読み込んだ先のホームページで行えば、設置も比較的容易なものになる。こうした大谷の隠れた魅力を発信していくことで、大谷のさらなる発展と地域の活性化につなげることができるだろう。

イメージ図

[28] 栃木トヨタホームページ　「グリーンスローモビリティ」 2021 年 12 月 10 日閲覧
https://www.tochigitoyota.com/event/2021/oya

[29] Oya, Stone City ホームページ　「大谷の奇岩群」 2021 年 12 月 20 日閲覧
https://www.tochigitoyota.com/event/2021/oya

おわりに

本論文では、まず第一章で、新型コロナウイルスについてまとめた。観光分野における新型コロナウイルスによる影響は多大なもので、旅行者に向け「新しい旅のエチケット」を公表し、感染防止に取り組むとともに、収束後に向けた「反転攻勢のための基盤整備」を打ち出し、観光地としての魅力向上、インバウンド旅行受け入れ態勢の充実などを目標に挙げていることが分かった。

第二章では本論文のテーマである大谷について基本的な情報をまとめた。1500 万年前に起きた海底火山の噴火を起源とし、古くは縄文時代から始まる大谷石文化の歴史をひもとき、昭和後期には一大産業にまで発展するに至った、石材として多くの優れた特性を持つ大谷石の特徴を押さえることで、観光地として再び脚光を浴びることとなった、大谷の再生を振り返ってきた。

第三章では宇都宮市、栃木県の持つ観光資源についてまとめた。宇都宮市には餃子やいちごなどの食資源、バスケやロードバイクなどのスポーツといったものがあり、栃木県内に目を向ければ、日光市の「日光の社寺」や温泉街、足利市の「あしかがフラワーパーク」などの存在から、それらとの提携による影響を示唆した。

第四章では大谷で活動している方々へのインタビュー調査を行い、その結果についてまとめた。それぞれ立場の異なる方々からそれぞれの視点で大谷についてお話しいただき、大谷の抱える課題を改めて発見することができた。

そして、第五章では、これらの調査と、私が今まで大谷と関わってきた経験や、本論文を書くにあたり行った調査をもとに、私自身の視点で大谷がより発展するための方針を示した。

本論文では以上のような内容となったのだが、何度も挙げているように、大谷は現在人気を博している観光地となっているが、その魅力はまだ十分に認知されきっていないのが現状である。たとえば私が、大谷に遊びに来たことのある友人と話をしたときも、「大谷にはあまり見る場所がない」と言う話をされたり、バスに乗ったときに、大谷を楽しみにしている観光客がその後すぐ帰っていく姿を見たりといった経験をしたことがある。本稿がそんな大谷の魅力をより発信していくための一助となれば、筆者としても冥利に尽きるというものである。

あとがき

ここ数年で急速に発展してきた大谷だが、未だ発達しきっていない部分も多く、その伸びしろを活かすために体験型観光の充実、宇都宮特有の酒類の提供、隠れた魅力の発信を推し進めていかなければならない。また、その上で、本論文で十分に取り扱うことのできなかった、宿泊施設や空き家の活用についてなど、大谷地区はまだまだ多くの課題を残している。今後大谷が観光地として、より発展していくために、これらの課題解決に向けて地域全体で取り組んでいくことを願うとともに、最後になってしまったが、本論文を作成するにあたり協力いただいた皆様へ感謝の念を述べることで、本論文のむすびとする。